

3. 発生予察情報の発表状況

1) 注意報の内容

| 種 類    | 発 令 月 日 | 対 象 作 物                 | 対 象 病 害 虫                  | 情 報 内 容   |
|--------|---------|-------------------------|----------------------------|---|
| 注意報第1号 | 4月2日    | 麦類                      | 赤かび病                       | <p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生時期：4月上旬以降</p> <p>3. 発生程度：多</p> <p>4. 根拠：</p> <p>①3月下旬以降も断続的に降雨が続いており、また、気象予報によると4月中旬までは曇りや雨の日が多い見込みであるとされている。このことは、本病の感染ならびに病勢進展にいちじるしく好適である。</p>   |
| 注意報第2号 | 4月2日    | ばれいしょ                   | 疫病                         | <p>1. 発生地域：県南部早出し栽培地域</p> <p>2. 発生時期：4月上旬以降</p> <p>3. 発生程度：多</p> <p>4. 根拠：</p> <p>①3月6半旬に南高来郡愛野町、口之津町の早出し栽培で発生を確認した。</p> <p>②3月上旬からの断続的な降雨により、ばれいしょの生育は軟弱徒長ぎみである。</p> <p>③気象予報によると4月中旬までは曇りや雨の日が多い見込みであるとされており、本病の感染ならびに病勢進展に好適である。</p> |
| 注意報第3号 | 5月15日   | ミカン、ビワ、ナシ、キウイフルーツ、モモ、カキ | カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ） | <p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生程度：多</p> <p>3. 根拠：</p> <p>①予察灯での誘殺量が前年に比べ多く、屋外の街灯への飛来も多い。</p> <p>②5月中旬現在、カンキツ園等での生息量が多い。</p> <p>③2月中旬の越冬調査における生息量は、チャバネアオカメムシが1㎡あたり0.5頭（15地点平均）であった。</p>  |
| 注意報第4号 | 5月27日   | ミカン                     | アブラムシ類                     | <p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生程度：多</p> <p>3. 根拠：</p> <p>①5月26日現在、新葉における寄生葉率90～100%の園が各地で見られ、一部では激発園がある。</p> <p>②発生が少ない園でも、有し虫が多く、今後発生増加が予想される。</p> <p>③種類は、ワタアブラムシが主体で、一部でミカシロアブラムシの発生がみられる。</p>  |

| 種 類    | 発令月日  | 対象作物 | 対象病虫害            | 情 報 内 容  |
|--------|-------|------|------------------|--|
| 注意報第5号 | 6月3日  | 水稲   | ヒメトビウンカ<br>と縞葉枯病 | <p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生程度：やや多</p> <p>3. 発生時期：ヒメトビウンカ やや早（第1世代成虫最盛期 6月1～2半旬、第2世代成虫最盛期 7月1～2半旬）</p> <p>4. 根拠：<br/>                     ①5月下旬の爰、飼料畑におけるヒメトビウンカ第1世代虫の生息量は20回すくい取りで7.5頭と前年（3.0頭）より多かった。<br/>                     ②ラテックス凝集反応法による検定の結果、越冬世代の保毒虫率は14.6%、第1世代の保毒虫率は8.5%（前年1.8%）と高い。<br/>                     ③5月末現在、早期水稲での縞葉枯病の発生は未確認である。</p>  |
| 注意報第6号 | 6月12日 | カンキツ | かいよう病            | <p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生時期：6月以降</p> <p>3. 発生程度：多</p> <p>4. 根拠：<br/>                     ①6月上旬の巡回調査の結果、一部で多発圃場がみられ、春葉での発生圃場率28%（前年2.6%）平均発病葉率1.6%（前年0.02%）と高い。<br/>                     ②6月に入って春葉での発生が急増しており（5月下旬発生圃場率4.3%、平均発病葉率0.01%以下）、6月10日現在、初期病斑が多く今後さらに発生増加が予想される。<br/>                     ③温州みかんの果実での発生は認めていないが、すでに晩生柑橘類の果実での発生がみられる。<br/>                     ④気象予報によると、6月下旬は梅雨前線の活動が活発化し曇りや雨の日が多い見込みである。</p> |
| 注意報第7号 | 7月13日 | いちご  | うどんこ病(育苗床)       | <p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生程度：多</p> <p>3. 根拠：<br/>                     ①7月下旬の巡回調査の結果、一部で多発圃場が見られ、平均発病株率4.4%（前年1.5%）、発生圃場率9.4%（前年6.4%）と高い。<br/>                     ②平均発病株率は6月上旬2.5%、6月下旬3.6%、7月上旬4.7%と増加している。</p>   |
| 注意報第8号 | 8月4日  | カンキツ | かいよう病            | <p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生時期：8月以降</p> <p>3. 発生程度：多</p> <p>4. 根拠：<br/>                     ①7月下旬の巡回調査の結果、温州ミカンでの発生圃場率6.0%（前年9%）平均発病葉率1.7%（前年0.3%）、平均発病果率0.1%（前年0.04%）であった。</p>  |

| 種 類     | 発令月日   | 対象作物 | 対象病虫害    | 情 報 内 容   |
|---------|--------|------|----------|---|
| 注意報第9号  | 8月4日   | 茶    | チャノカゲノハダ | <p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生程度：多</p> <p>3. 根拠：<br/>①子察灯及びフェロモントラップによる第2世代の誘殺量が平年に比べて多い。<br/>②第3世代発蛾最盛期は、8月1～2半旬と予想される。</p>  |
| 注意報第10号 | 7月2日   | 早期水稲 | 穂いもち     | <p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生時期：出穂期以降</p> <p>3. 発生程度：やや多</p> <p>4. 根拠<br/>①8月5日に行った普通期水稲における葉いもちの一斉調査の結果、発生圃場率は54%、平均発病株率は14%と高かった。また、病斑は停滞型が主であったが、一部進行型やずりこみも認められた。<br/>②気象予報によると、出穂期に当たる8月下旬並びに9月の降水量は平年より多い見込みである。</p> |
| 注意報第11号 | 11月5日  | いちご  | うどんこ病    | <p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生程度：多</p> <p>3. 根拠：<br/>①10月下旬の巡回調査の結果、一部多発圃場が見られ、発生圃場率は28%（前年0%）、平均発病株率は2.5%（前年0%）と平年に比べ高い。<br/>②発生時期が例年に比べて早い。</p>   |
| 注意報第12号 | 12月25日 | いちご  | うどんこ病    | <p>1. 発生地域：県下全域</p> <p>2. 発生程度：多</p> <p>3. 根拠：<br/>①12月中旬、発生圃場率、発病株率、発病株率とも平年に比べ高く、一部に多発圃場がみられる。<br/>②夜冷、株冷栽培だけでなく普通栽培でも発生の増加がみられる。</p>   |

2) 特殊報の内容

| 種 類    | 発 令 月 日 | 対 象 作 物   | 対 象 病 害 虫 | 情 報 内 容   |
|--------|---------|-----------|-----------|---|
| 特殊報第1号 | 10月9日   | キンギョソウ根腐病 | キンギョソウ    | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 病原菌: <u>Pythium spinosum</u> Sawada</li> <li>2. 発生確認: 平成2年 3月 9日</li> <li>3. 菌の同定: 平成4年 9月18日</li> <li>4. 発生場所: 西彼杵郡三和町</li> <li>5. 診断同定: 平成2年3月、長崎農協からの診断依頼に基づき、総合農林試験場で調べた結果、上記病原菌による病害であると診断された。本病原菌によるキンギョソウの病害としては、幼苗期に発生する「苗腐病」(沢田ら、1926)が知られているが、本報での生育中～後期における発生の記録はなく、本病は国内で未報告の病害と判断された。そこで、平成4年度日本植物病理学会九州部会(平成4年9月18日、熊本市)において、幼苗期の苗腐症状も含めて新たに根腐病と称することが松尾(総合農試)により報告・提案された。</li> <li>6. 発生状況: 9月中旬に植付けられたハウス栽培のキンギョソウが、12月中旬の開花始め頃から萎ちよう枯死した。ハウス内では全面的に点在して発生し、特定の場所に偏っての発生は認められなかった。しかし、品種間に発生の差が認められ、ピンクバタフライやライトピンクバタフライの発生株率が高く、イエローバタフライやホワイトバタフライではほとんど発生がなかった。現地では4戸の農家がキンギョソウを栽培しており、本病の発生はいずれのハウスでも認められた。</li> <li>7. 症 状: 根が褐変して腐敗し、株全体が萎ちよう枯死する。萎ちよう開始期の根は細根や根毛が少なく、太い根が部分的に褐変している。</li> <li>8. 防除対策: 発生は場での栽培を避け、土壌の排水を良くするとともに過湿にしない。薬剤防除については登録薬剤がないため適用できない。</li> </ol> |
| 特殊報第2号 | 10月9日   | イチゴ       | イチゴ葉枯炭そ病  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 病原菌: <u>Colletotrichum acutatum</u> Simmonds</li> <li>2. 発生確認: 平成3年 8月 9日</li> <li>3. 菌の同定: 平成4年 5月26日</li> <li>4. 発生場所: 長崎市、北高来郡森山町</li> <li>5. 診断同定: 平成3年8月、長崎農協からの依頼に基づき、総合農林試験場で診断した結果、病斑部から炭そ病菌の一種が検出され、症状も炭そ病に一部類似するが、従来の炭そ病とは異なる病害であると診断された。農林水産省野菜・茶葉試験場久留米支場に病原菌の同定を依頼した結果、上記病原菌による病害とされた。平成4年9月、諫早農業改良普及所からの依頼に基づき、病害虫防除所で診断した結果、前述の病害と同一の病害であると判定された。文献調査の結果、本病はイチゴにおいてわが国では未報告の新病害と考えられ、平成4年度日本植物病理学会大会(平成4年5月26～28日、盛岡市)において、「葉枯炭そ病」と呼称することが松尾ら(総合農試)により報告・提案された。</li> </ol>   |

| 種 類          | 発 令 月 日 | 対 象 作 物 | 対 象 病 害 虫     | 情 報 内 容  |
|--------------|---------|---------|---------------|--|
| (特殊報<br>第2号) |         |         |               | <p>6. 発生状況：親株床で5月中旬頃から親株の葉柄やランナーに発病が認められ、子苗に広がった。子苗では7月上旬頃から次第に蔓延し始め、台風の到来後一挙に広がった。その後本病の蔓延や病徴の進展は8月中旬頃まで続き、8月下旬以降気温が低下し始めると緩慢となった。また、9月中旬発病株を本ばへ定植したところ、その後の展開葉や果実には発病は認められなかった。</p> <p>7. 症 状：本症状は葉と葉柄およびランナーに認められ、葉の葉枯れ症状が最も特徴的であり、炭そ病のように急激な萎ちょう症状は認められない。発病株は、発病後期間が長くなると新葉に次々と病斑が形成され、葉柄は折損するなどして次第に株の生長が止まり、衰弱して枯死する。葉では、はじめ主として新葉の葉縁に、黒い不整形の病斑を形成する。その後成葉になっても病斑はあまり拡大せず、他の成葉の健全部に新たな病斑を形成することはほとんどない。また、病斑の色は次第に黒褐色になり、縮れて破れやすくなる。多湿条件下では比較的新しい病斑は灰色を帯び、後に鮭肉色の孢子堆を極めて容易に形成する。葉柄では炭そ病と同様の長さ3～5mm、紡錘形～だ円形の黒褐色～黒色のくぼんだ病斑を形成する。この病斑は葉柄を大きく取り巻くようには進展せず、乾腐的で、古くなるとその部分から外側に曲がり、風や作業上軽く触れただけで折れやすい。さらに、多湿条件下では葉の病斑と同じように鮭肉色の孢子堆を容易に形成する。ランナーでは葉柄と同様の5～10mmの病斑を形成する。病斑がランナーを取り巻くように拡大すると病斑部から先のランナーは黒変枯死し、ポットに受けた子苗が発根・活着していない場合、その苗は萎ちょう枯死するため苗数が確保できない。クラウン部では炭そ病に見られるような褐変腐敗を生じることとはなく健全である。また、根の発病も見られない。</p> <p>8. 病原菌の伝染源：発生状況から従来の炭そ病菌と基本的に同じと推察され、潜在感染した親株のほ場への持込みや土壌中に残った発病葉などの残渣が主要な第1次伝染源となり、高温多湿条件下で発病して病斑上に形成された分生孢子が雨滴などによって飛散し、新たな株へ伝染していると考えられる。</p> <p>9. 防除対策：防除対策は炭そ病に準じ、健全な親株床・苗床で、健全な親株を用いて採苗並びに育苗する。また、育苗中の雨よけは発病の抑制効果が高いと考えられる。</p> |
| 特殊報第3号       | 10月9日   | ばれいしょ   | ジャガイモシストセンチュウ | <p>1. 病害虫名：ジャガイモシストセンチュウ<br/><i>Globodera rostochiensis</i> (Wollenweber, 1923) Behrens, 1975</p> <p>2. 発生確認：平成4年 7月27日</p> <p>3. 種の同定：平成4年 8月10日</p> <p>4. 発生場所：長崎県南高来郡 南串山町、加津佐町、南有馬町</p> <p>5. 診断同定：現地からの診断依頼に基づき、貯蔵ばれいしょに付着するシストが長崎県総合農林試験場で顕微鏡観察された結果、ジャガイモシストセンチュウであると診断された。また、農林水産省九州農業試験場線虫研究室に同定依頼された結果、ジャガイモシストセンチュウと同定された。</p> <p>6. 現地における発生状況：8月19～20日に現地の土壌を採取し、検診を行った結果、南串山町、加津佐町、南有馬町のばれいしょ作付予定ほ場の一部で本線虫のシスト(包囊)が検出された。ばれいしょの生育中における発生状況は未確認である。</p>   |

| 種 類          | 発令月日 | 対象作物 | 対象病害虫 | 情 報 内 容   |
|--------------|------|------|-------|---|
| (特殊報<br>第3号) |      |      |       | <p>7. 国内における発生状況：昭和47年に北海道虻田郡のばれいしょほ場で発見され、平成4年7月1日現在、北海道内の1市14町で発生が確認されている。</p> <p>8. 作物の被害と症状：線虫の寄生により根の機能低下し、株の生育が不良となる。北海道では症状が激しい場合、生育初期から軽い萎凋が始まり、開花期頃には全身のしおれと下葉の黄化がみられ、次第に下葉からの枯死と落葉によるフェザーダスター（毛ばたき）症状を生じ、健全株に比べ1ヵ月ほど早く株全体が枯死するとされている。</p> <p>9. 線虫の形態</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 卵 : 長径 0.10mm、短径 0.04mm。</li> <li>2) 2期幼虫 : 体長 0.44mm 線形。</li> <li>3) 雄成虫 : 体長 1.08mm、線形。</li> <li>4) 雌成虫 : 体長（頸を含む）0.73mm、体幅 0.58mm、頸部が突出した球形。</li> <li>5) シスト : 体長（頸部を除く）0.58mm (0.35~0.76mm)<br/>体幅 0.56mm (0.35~0.80mm)<br/>グラネク値（陰門窓・肛門距離/陰門窓の径）4.5±1.1</li> </ol> <p>10. 線虫の生活史：シスト内の卵はシストの中で成熟し1期幼虫となる。1期幼虫は卵の中で脱皮し2期幼虫となる。この時点でばれいしょが植え付けられると、ばれいしょの根から分泌される化学物質により孵化が促進され2期幼虫はシストの陰門から土壌中に遊出する。遊出した2期幼虫は、ばれいしょの根に向かい口針により表皮細胞に穴をあけ根の組織内に侵入加害する。根の中で3回の脱皮を繰り返し、4期幼虫を経て成虫となる。この間に雌の虫体は肥大し球形となる。球形となった雌成虫の体は根の組織からはみだし、頸部だけを根の組織に突っ込んだ状態となる。雄成虫の虫体は肥大せず細長く、雌成虫と交尾後死亡する。雌成虫ははじめ白色であるが次第に黄白色から褐色と変化し体内は卵で満たされる。褐色になった雌成虫は既に死んでおり外皮は硬化する。この状態をシスト（包嚢）と称す。シストは根の老化にとまない土壌中に脱落し、土壌中で長期間生存する。</p> <p>11. 発生生態：</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 本県の2期作ばれいしょにおける本線虫の生活様式や発生生態は不明である。</li> <li>2) 北海道では、1世代の所要日数は6~8月には約40日であるが、通常の栽培でみられる2世代目幼虫盛期の8月には根は老化するので大多数は1世代に留まると考えられている。</li> <li>3) 本線虫はナス科作物だけに寄生する。</li> <li>4) 本線虫は16~22℃でよく増殖し、13℃以下、25℃以上では増殖は少ない。</li> <li>5) ほ場では地表から深さ25cmまでの土壌に80%が分布し、深さ50cm以上でもわずかながら分布している。</li> </ol> <p>12. 防除対策：本県の栽培実態に応じた防除技術の確立が急務であるが、当面、次のような防除法が考えられる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 発生ほ場における対策 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) ばれいしょの植付前に土壌消毒を行なう。薬剤は病害虫防除基準（p. 71, 218）による。</li> <li>(2) ほ場にいもが残らないようていねいに収穫作業を行う。</li> <li>(3) 線虫による被害の症状が認められたほ場ではばれいしょの作付をできるだけ避け、ナス科作物（トマト、なす等）以外の作物を栽培する。</li> </ol> </li> <li>2) 蔓延防止対策 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 種いもは植物防疫所の検査に合格したものを使用する。</li> <li>(2) 発生ほ場で使用した農機具、履物等は、他の場所へ移動する前に、土をていねいに除去・洗浄する。</li> </ol> </li> </ol> |